中世益田講座　第5回（全9回）

益田氏歴代の城“七尾城”

櫓門の想像図

三宅御土居跡から大橋を渡って益田川をこえると、やがて益田氏の城、七尾城跡の麓に着きます。七尾城は全長600m以上の大規模な山城です。江戸時代の城のような石垣や天守はありませんが、曲輪（くるわ）（土を削って造られた平坦地）や、土塁、畝状（うねじょう）空堀群（からぼりぐん）（斜面に連続して掘った竪堀）などで城は守られていました。また、厩の段近くには石積み井戸が残され、かつての大手門は現在、医光寺前に移築されています。南北朝時代には築城されていたことが益田家文書から知られます。

過去に行われた発掘調査では、本丸の入り口に大型の門跡が見つかりました。周辺からは瓦が多く出土し、瓦葺きの櫓門（やぐらもん）であったと想像されます。また、二の段の北側では、茶の湯に使用される天目茶碗が出土し、茶庭と考えられる庭園跡や礎石建物跡も見つかっています。出土した遺物は、ほとんどが16世紀前半～中頃の陶磁器で、藤兼が「大手之曲輪（おおてのくるわ）」に隠居していたという益田家文書の記述と時期的に一致することがわかりました。

中腹に鎮座している住吉神社もまた、益田氏と縁の深い神社です。祭神は海の神様であり、初代の国兼が浜田の上府に勧請（かんじょう）（他の神社から分霊し祭ること）し、兼高が益田へ移住する際に、城の鎮護神として移し祭ったといわれています。以後、益田家の信仰を受け、元祥は朝鮮出兵から無事に帰還した報恩として社殿を改築しました。

駐車場から本丸までは徒歩で約20分、登山道が整備されていますので、比較的簡単に登ることができます。また、「益田歴史を活かしたまちづくりの会」により、本丸跡に大幟が揚げられるなど、市民による活用も積極的に行われています。

本丸跡からのながめ

三宅御土居跡や中須東原遺跡を見渡すことができます

【問い合わせ先】市文化財課　☎31・0625